

内山完造研究会報告③

上海における内山完造ゆかりの地

川崎 真美（東京大学学術支援職員）

はじめに

上海を愛した日本人であり、上海でも魯迅の友人として知られた存在である内山完造（1885-1959）。内山完造（完造）が1913年に28歳で参天堂（現・参天製薬）の社員として上海に向かうまでの、国内のゆかりの地についてはすでに紹介したが⁽¹⁾、筆者は2019年1月と8月の2度にわたり、戦前に完造が過ごした上海を訪問する機会を得た⁽²⁾。本稿では、完造が残した『花甲録』（岩波書店、1960年）⁽³⁾の記述を頼りに、彼と縁のあった場所の現状について当時の記録や現在の写真とともに紹介する。

ありし日の建物が残るそばから開発が進むなど、今昔が感じられる上海。上海市は歴史的に貴重な建物などを「上海市優秀歴史建築」として指定し、その保存に取り組んでいる⁽⁴⁾。「優秀歴史建築」以外にも、「上海市記念地点」「市級建築保護単位」「SMART MUSEUM」などのプレートが付された歴史的建造物が数多く存在している。内山書店旧址や内山完造旧居など、いくつかの完造ゆかりの場所・建物もそれら歴史的建造物に指定され、現存している。自分の足で上海を歩き回ることによって、完造ゆかりの地に立ち、その位置関係や距離感などから内山完造が過ごした上海を追体験することができた。

本稿では、上海のなかでも、共同租界のあった外灘界限（地図1）と、戦前に日本人が多く住んでいた虹口地区周辺（地図2）を中心に紹介する。特に断りのない限り、写真、地図⁽⁵⁾は筆者の撮影、作成による。

1. 日信薬房

四馬路の河南路と江西路との中程にある極めて陰気な日信大薬房に行李をといたのである。この日から私の上海生活が始まったのだ。
(1913年、岩53頁、東94頁)

1913年3月、参天堂の出張員として内山完造は初めて上海の地に足を踏み入れた。参天堂の上海代理店であった日信薬房⁽⁶⁾を拠点に、「大学目薬」（図1）を売るべく、中国国内を飛び回り、宣伝活動をおこなった。日信薬房は、日本綿花（後の日綿実業、ニチメン、現・双日）が1903年7月末に上海支店として設立した商社・日信洋行（図2）の薬品部にあたり、主に高橋盛大堂薬局（現・盛大堂製薬）の「清快丸」を販売していた⁽⁷⁾。

内山完造が降り立った1913年、上海の日本人数は1万人弱⁽⁸⁾であった。2年後の1915年には日本人の数は「上海在住外国人のトップになり、1927年末には約2万6000人と、上海の外国人総数の半数近くを占めるようになっていた」⁽⁹⁾。日本人の数が急増していくなか、1947年12月に引き揚げるまで、多くの時間を完造は上海で過ごした。



図1 「大学目薬」の広告

出典：『大阪毎日新聞』1919年8月26日（左）、
『民国日報』1917年4月22日（右）。



図2 当時の日信洋行・上海支店

出典：双日歴史館ウェブサイト
<https://www.sojitz.com/history/jp/company/post-4.php>

内山完造が当初過ごした日信薬房の建物は、「四馬路〔福州路〕の河南路と江西路の中程」（写真1、地図1－日信薬房①）には現存しない。残っているのは、アメリカ人の社交場として1917年に設立されたアメリカンクラブの建物（現存の建築は1920年代竣工、現在は上海市人民法院に使用され、高法大楼という）と、共同租界の警察本部の建物（1935年竣工、現在は上海市公安局）であり、いずれも上海市優秀歴史建築に指定されている⁽¹⁰⁾。

日信薬房の所在地は、『申報』第14607号（1913年10月5日）掲載の広告などに「総經理処上海四馬路」と記されており、確認ができる⁽¹¹⁾。当時の四馬路は「現代の流行を追ふ支那料理店広東茶館飲食店等ありて夜に入れば芸者の奏樂狂ふ計りに盛なり其外大小の劇場等も多く夜の四馬路は所有欠陥なき娛樂機関を以て遺憾なく支那人の心を充実せしめ日本横浜の芝居町か桑港支那町に匹敵せり」⁽¹²⁾と、「夜の上海を代表す」⁽¹³⁾る場所だったという。しかし、1920年代半ばには「夜の歡樂街は次第に姿を消し、『真面目な書店や雜貨店や飲食店』となった」⁽¹⁴⁾。

江西路の裏手には、1910年代に建てられたレンガ造りのアパート（写真2、地図1－恒業里）が残っている。また、近くにある三井洋行の建物（写真8、地図1－三井洋行）も1903年に建てられたものであり、当時の雰囲気を感じることができる。

『花甲録』の1915年の記述には、「その頃日信薬房は、棋盤街の四馬路と五馬路の中間の交通路と云う通りの二階を住居として居った」（岩86頁、東145頁）とあり、内山完造が上海に行ってから数年後に日信薬房は移転している。移転先は「上海英租界交通路105号」⁽¹⁵⁾（地図1－日信薬房②）であった。なお、「大学眼薬代理店日信薬房」が引きあげることになったため、1924年末に完造は「上阪して打合せ」をおこない、「大学眼薬を内山書店の中に移」（岩139頁、東228頁）したという。



写真1 現在の「四馬路の河南路と江西路の中程」



写真2 恒業里（上海市優秀歴史建築）

地図1 外灘界隈



2. 内山書店

(1) 北四川路魏盛里（地図2 - 最初の内山書店）

旅行から帰った時にみきは北四川路魏盛里の家に移転して居った。

(1916年, 岩92頁, 東154頁)

北四川路魏盛里と云う, まるで小売屋と云うもののないところの, しかも露路の中に粟粒のような内山書店と云う内職本屋が生まれたのである。(1917年, 岩100頁, 東167-168頁)

内山完造は, 1915年に井上みき(美喜)と婚約し, 1916年に結婚した。二人は当初「吳淞路義豊里の164号」(岩90頁, 東151頁, 地図2-義豊里)の2階を借りて住んだが, 完造が同年7月下旬に旅行から戻ると, みきが北四川路魏盛里に転居していた。翌1917年には, 「上海には讚美歌も聖書も売ってる店がない(聖書会社が売って居ることを知らなかった)ので, 一つ之を取次ぐ事にしよう, 序でにキリスト教の書籍一切を取りついたらと[考え, ……]牧野牧師の紹介で警醒社との取引が開られた。これが上海内山書店の誕生である」(岩96頁, 東160-161頁)。

内山書店はまずは北四川路魏盛里から始まったのである。現在は建物も路地も残っておらず⁽¹⁶⁾, 写真3では中央のビルの裏側あたりが跡地になる。左側奥に福民医院(現・第一人民医院分院)がある位置関係である。



写真3 現在の魏盛里

その後, 路地内の向かい側の2戸を譲り受けるなどして, 内山書店は「石庫門(中国式借家)二軒を一つに」するかたちで規模を拡張した。完造は「誰が来て見ても押しも押されもせん日本でも一流の書店であると云うた」とする(1924年, 岩138-139頁, 東227-228頁)。

さらに昭和初期の円本時代に入ると, 内山書店は「現代日本文学全集を1000部, 世界文学全集400部, 経済学全集500部, マルクス・エンゲルス全集350部, 新経済学全集200部, 法学全集200部, 長篇小説全集300部, 大衆文学全集200部等の取次ぎをして毎月の荷物の入荷には露路の中は山のように荷物を積み上げるようになった」(1926年, 岩145頁, 東237-238頁)。内山書店の規模が大きくなっていく様子が窺える。1937年3月に書かれた上崎孝之助(後の上海日本近代科学図書館館長)による「上海地方視察報告書」では, 内山書店が「最近」1年間に扱った単行本の冊数・金額は10万冊・20万ドル, 雑誌は1万8000冊・9000ドルにも上ったとされる。また, 他の日本書籍販売店に比べ, 購買層に占める中国人の割合が多かった⁽¹⁷⁾。

(2) 北四川路底(地図2-最後の内山書店)

この年内山書店は上海北四川路底の新店舗に移転した。実はこの店舗も止むを得ず引き受けたもので

あったのだが、いよいよ街頭に進出したことになって急速に発展するようになった。

(1929年, 岩 161頁, 東 263頁)

内山書店は1929年に、今も「内山書店旧址」(写真4)として残る「北四川路底」に移転した。現在は中国工商银行の支店になっており、1階に完造の著作や写真などの資料が展示されている。2019年1月の訪問時は春節が近い時期であり、新年の飾り付けがなされていた(写真5)。なお、開館日が限られているので、訪問の際には事前に確認をとった方が良い。

内山書店旧址正面の掲示(完造と魯迅のレリーフ付き, 写真6)によると、「1980年8月26日に『内山書店』は上海市政府により、上海市記念地」に指定されている。

この内山書店からほど近くに上海海軍特別陸戦隊本部(写真7, 地図2)があった。「陸戦隊へ送られる一団が来たので、何んの気なしに見るとその中に魯迅先生の実弟周建人先生が家族とともに居られたので、私は飛び出して行って陸戦隊員に理由を話して釈放して貰うた」(1932年, 岩 183頁, 東 297頁)とあるが、現地に行ってみると、完造が書店から外を「何んの気なしに」見ていて起こりうるエピソードだと実感した。



写真4 内山書店旧址



写真5 内山書店旧址内の展示

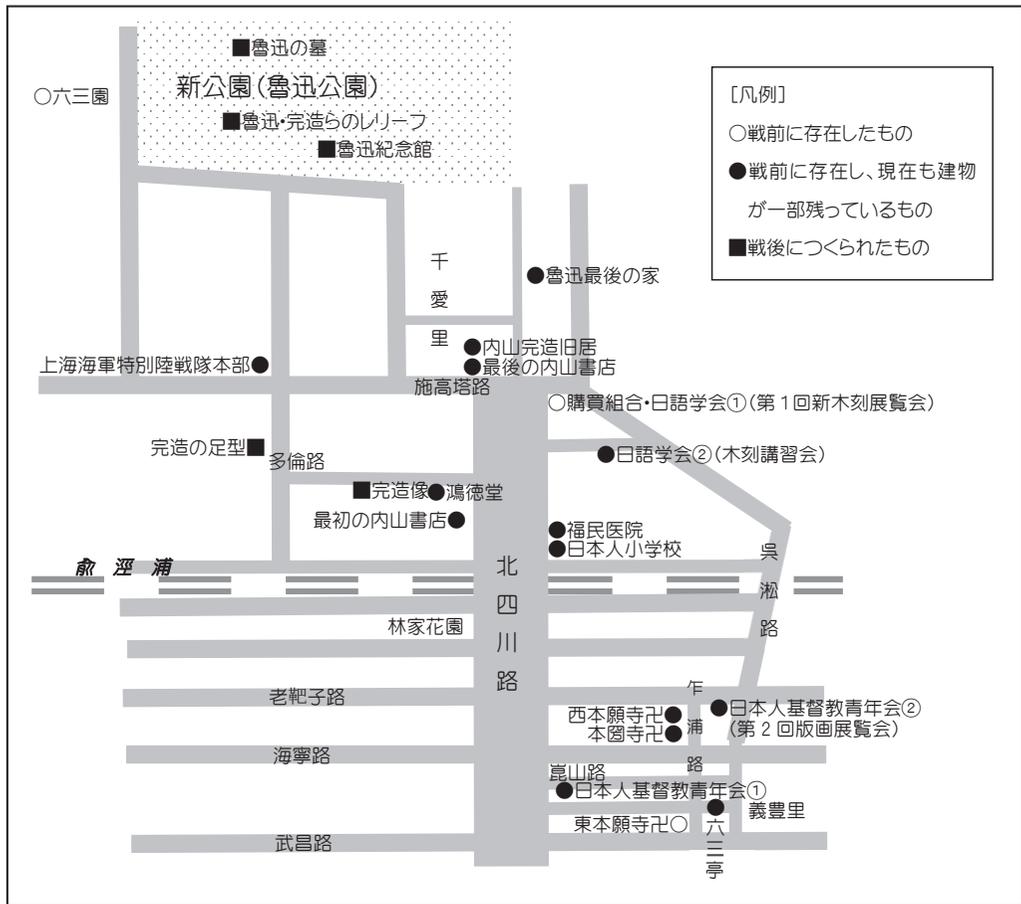


写真6 内山書店旧址正面の掲示



写真7 現在も残る「上海海軍特別陸戦隊本部」の建物

地図 2 虹口地区周辺



(3) 支店

内山書店は規模拡大に伴い、上海各所に支店を開いた。ここでは、『花甲録』に記述があり、場所を確認できた2か所を紹介する。

①内山書店支店・鈴木洋行（地図1）

魯迅先生一家も無事に英租界の支店の方へ避難させることが出来た。

(1932年、岩185頁、東299頁)

1930年頃、租界中心部の顧客を対象として鈴木洋行2階の一室に開店した支店で、1932年の上海事変の際、魯迅が家族とともに避難した⁽¹⁸⁾。なお、魯迅はここだけでなく、内山書店本店や完造宅に避難することがあった⁽¹⁹⁾。

写真8は現在の内山書店支店跡付近の状況で、当時の建物は残っておらず別なビルが建っている。なお、左手には三井洋行（三井物産上海支店、上海市優秀歴史建築）の建物が現存する。

②内山書店支店・中美図書公司（地図1）

南京路のケリーウォッシュ（別発公司）とアメリカンパブリッシングコンパニーとを内山書店で管理せよという命令が来たので「……」アメリカンパブリッシングの方だけ私の店で管理することにした。

(1942年, 岩 264 頁, 東 424 頁)

内山書店も敵産管理を命ぜられて、南京路 160 号の中美図書公司へ進出した

(1945年, 岩 305 頁, 東 488 頁)

中美図書公司 (Chinese American Publishing) は米国系の洋書店であり、魯迅がしばしば洋書を購入したという。1942 年にその管理を完造が任され、内山書店の支店となったが、「1945 年に再び米国人が接収」⁽²⁰⁾した。現在も当時の建物が残っている (写真 9)。



写真 8 ①内山書店支店跡付近と旧三井洋行 (左)



写真 9 ②内山書店支店 (手前の建物の一部)

3. 千愛里・内山完造旧居 (地図 2)

北四川路底の内山書店の裏には、完造が住んでいた家が残っており (1931~1942 年居住)、現在も住宅として使われている。写真 10 の右側が旧居の門で、左奥が内山書店跡の裏口にあたる。2019 年 1 月に訪問した際には門が閉まっておらず、なかの様子を窺えなかったが、8 月に行ったときには開いており、完造と魯迅がマージャンなどをしていた庭も見ることができた (写真 11)。ここから魯迅が最後に過ごした家は至近であり、そうした往来のしやすさ、距離的な身近さも二人の関係性がより深かったことを示している。



写真 10 内山完造旧居 (門)



写真 11 内山完造旧居 (内庭と建物)

内山完造が住んでいたあたりは、東亜興業株式会社が 1921 年に日本居留民向けに建設した集合住宅「千愛里」(写真 12) という。現在の千愛里の周辺はハートのモチーフなどがあり、カップルにとって

縁起の良いところとして、インスタ映えのスポットにもなっている（写真13）。



写真12 千愛里の入り口



写真13 千愛里の周辺スポット

4. 新公園（魯迅公園）（地図2）

この頃私は毎朝妻と二人で新公園に散歩したのであるが、冬の日など白皚々として美しい一面の雪の上に第一歩を印して歩く愉快を十二分に味うたものである。

（1918年、岩104頁、東173頁）

昨年9月に毎晩夕涼みがてら新公園へ蘇浙戦争の砲音を聞きに行った

（1925年、岩142頁、東233頁）

永年つづけて居った新公園への朝の散歩が私の脱腸が原因となってだんだんと遠のいて遂に中止したことが妻の肥満の原因であったと思うたのはずっと後のことであった。／私達夫婦は魏盛里に住んで以来毎朝未明に新公園への散歩をつづけたのである。

（1929年、岩162頁、東264頁）

現在の上海の地下鉄3号線・8号線の虹口足球场駅を降り、南西に進むと、左手に魯迅公園（写真14）がある。魯迅公園（1922年に虹口公園、1945年中山公園、1950年虹口公園、1988年に現在の名前に改称）は、『花甲録』では当時の在留邦人間での通称であった「新公園」と記され、完造は妻・みきとともによく散歩したという。公園内には、魯迅逝去から20年の1956年に万国公墓から現在の場所に改葬された魯迅の墓があり、魯迅記念館（写真15）もある。同年11月に完造も同公園の墓地を訪れている⁽²¹⁾。

魯迅記念館の中には、内山書店に関する展示コーナーが存在する。岡山県井原市芳井生涯学習センターにある内山完造の胸像と同じものが収蔵されていると聞いていたが、今回は確認できなかった。なお、現在の建物は1998年にできたものである。

公園に入って正面には、魯迅公園の歴史を紹介する大きなレリーフがあり、魯迅と同時代の文化人なども描かれている（写真16）。完造も魯迅に向かって左隣に描かれている。



写真 14 魯迅公園入口



写真 15 魯迅紀念館内の内山書店展示コーナー



写真 16 魯迅公園内のレリーフ

5. 購買組合・日語学会——第1回新木刻展覧会・木版画講習会の開催場所（地図2）

北四川路狄思威路の購買組合楼上の日語学会で約70余点の〔世界の木刻（木版画）〕小展覧会を2日間開いたが、中国人の入場者が非常に少く、多くは日本人であったが、2日間に400人ばかりであった。これが新木刻（近代版画）の中国に於ける最初の展覧会であったのだ。

（1930年、岩170頁、東277頁）

内山完造は、1930年頃、購買組合の2階を無償で借りて、日本語を教える教室、日語学会を開いた。上海に多数ある日本語専門学校に「どうも満足出来ないで居った時に、適々鄭伯奇先生との話が遂に日語学会を設けるようになった」という。日語学会は「追い追い発展して5つの教室が満員になって二部教授さえするようになり、1931年には長春路に移転したが、満洲事変により学生が減り、経営の継続も難しく休校し、「再起出来なかった」（1931年、岩172頁、東280頁）。

日語学会については、1932年6月の在上海村井倉松総領事より斎藤実外務大臣宛公信「上海日本人基督教青年会ノ補助申請ニ関スル件」中に、「日語学会 北四川路底 邦人経営ノ昨年8月開講、約50名ノ学生ヲ収容セシカ時局ノタメ閉鎖シ今日ニ至リ会主亦避難帰國中ニテ実情ヲ詳ニセズ」⁽²²⁾との記述が見られる。満洲事変の影響で閉鎖している点から、完造の日語学会を指すものと思われる。

同じ購買組合の建物では、魯迅の協力のもと、1930年10月4～5日に、「世界版画展覧会」（第1回

新木刻展覧会)が開かれた⁽²³⁾。また、翌年の夏に完造の弟・嘉吉が上海を訪れた際、移転後の日語学会で木刻について「一八芸社の人々に魯迅先生の通訳でわずかに1週間の講習会」を開いた(岩175頁, 東284頁)。

長春路の日語学会の建物は現在も残っており(写真17)、「木刻講習会所旧址」というプレート(写真18)が掲げられ、1931年8月17~22日に魯迅が「木刻講習会」を開いたと記されている。



写真17 現在も残る日語学会の建物



写真18 「木刻講習会所旧址」プレート

6. 日本人基督教青年会

ここでは、内山完造が深くかかわった上海日本人基督教青年会(日本YMCA)⁽²⁴⁾について、まず、池田鮮『曇り日の虹——上海日本人YMCA史』(教文社、1995年)から略史を見ておきたい。

上海日本YMCAは1907年4月に創設され、乍浦路40号の建物を間借りした。夜学校や各種講演、機関誌の発行、寄宿舎の運営を主な活動とした。1912年に崑山花園22号ミッション・ビルの一棟へ移転、その後さらに隣の一棟を借用した。1916年頃には経営難から宿舎として使用していた一棟を返還した。また、正確な時期は不明であるが、1920年代後半から30年代初期にかけて、老靶子路にある「米国の安息日会が、1924年に」建設した教会・滬北会堂⁽²⁵⁾に移転した。1930年代には新会館の建築を模索したが、1937年の盧溝橋事件に端を発する日中戦争により、会館建設運動は頓挫し、老靶子路で活動を続けた。終戦後も英語教室などは続けていたが、1946年に引揚げのため教室を閉鎖し、上海日本YMCAはその歴史に幕を閉じた。

完造は1914年頃から日曜礼拝に参加するようになっていたが、1916年9月頃に正式に上海日本YMCA会員となった⁽²⁶⁾。1920年度総会で、完造は「人事と会員部委員」に任命され、「積極的にボランティアとして関わり始め」た⁽²⁷⁾。完造は夏期講座や旅行を企画したり、1923年の関東大震災の折には義捐金の募集を計画するなど活躍し、その後は理事も務めた。

以下、崑山花園と老靶子路の上海日本YMCAがあった建物について紹介する。

(1) 崑山花園(地図2-日本人基督教青年会①)

崑山花園22号に日本人基督教青年会と基督教会とが連合で、と云ふよりも青年会の中で日曜礼拝が守られて居ったので私は時々出席して居ったのである(1914年、岩73頁, 東124頁)

崑山花園(ベビーガーデン、崑山公園)は1897年に欧米人のための児童遊園として開放された。公園横の小道である崑山花園路には、上海日本YMCAが借りていた20世紀初めに建造されたレンガ造り

のアパートが複数、現在も当時のままの外観で残っている（写真 19・20）。



写真 19 崑山花園路の建物①



写真 20 崑山花園路の建物②

(2) 老靶子路——第 2 回版画展覧会の開催場所（地図 2 - 日本人基督教青年会②）

第二回の版画展覧会を考えた。今度は場所を老靶子路の日本人基督教青年会にして、仏蘭西小説の挿画を主としてやった。（1931 年、岩 170 頁、東 277 頁）

この年であると思う。第二回の版画展覧会を今度はフランスの小説の挿画を主にして開いた。第一回は地理的に中国人が来なかったと考えて、今度は老靶子路の JYMCA（日本人基督教青年会）で開いたが今度は前回よりもいっそう失敗であった。（1932 年、岩 189 頁、東 306 頁）

上海日本 YMCA の移転先である老靶子路の建物では、先の購買組合での第 1 回新木刻展覧会に続いて、1932 年頃に第 2 回版画展覧会が開かれた⁽²⁸⁾。当時の住所は「老靶子路 206 号」⁽²⁹⁾であった。建物は現存し、2019 年 1 月に訪れたときには一角が工事中であったが、8 月には宿泊所ができていた（写真 21）。離れたところからも外観を撮影（写真 22）したが、とても大きく立派な建物である。



写真 21 老靶子路の建物・正面



写真 22 老靶子路の建物・側面

7. その他

(1) 多倫路（地図 2）

北四川路底の内山書店跡近くの多倫路には、歴史的建造物や文化人の旧居などが多数あり、「多倫路

文化名人街」として整備されている。魯迅など文化人の銅像や足型が展示されており、完造のものもあった。



写真 23 内山完造の足型



写真 24 内山完造像

また、多倫路には1928年建立のカソリック教会・鴻徳堂（写真 25）があるが、上海で唯一の中国式の建物の教会である⁽³⁰⁾。両サイドに獅子（唐獅子）が置かれているのが特徴的である。1945年1月にみきが逝去すると、同教会でその葬儀がおこなわれた。当時の新聞記事に「多倫路上海教堂」とあり、確認できた（図 3）。



写真 25 鴻徳堂



図 3 内山みきの訃報記事

出典：『新申報』1945年1月14日2面

(2) 万国公墓（宋慶齡陵園）

最後に、完造とみきが眠る万国公墓を紹介したい。同公墓は本稿の地図で扱った範囲には含まれず、上海の西郊に位置する。

みきは当初、静安寺の向かいにあった外国人墓地（静安寺路外国公墓）に埋葬された。しかし、同墓地は1950年代半ばに公園につくりかえられ、1954年2月にみきは万国公墓に改葬された⁽³¹⁾。完造は1959年9月に74歳でその生涯を閉じ、同年10月に埋葬された。

万国公墓は、中国人が上海で造った最初の「商業性公墓」であり、数多くの著名人の墓があることで知られていたが、1934年に上海市政府衛生局が管理する公営公墓となった。1984年に孫文の妻・宋慶

齢の遺骨が埋葬され、「宋慶齡陵園」と改称したが、著名人や外国人の墓地も変わらず存在し⁽³²⁾、そこは現在も万国公墓と呼ばれている。同公墓内の「外籍人墓園」区画の入ってすぐのところに、完造・みきは眠っている。

二人が眠る「比翼塚」(写真 26・27)は、「往還の橋を形どった墓石と、書物を開いた形の石碑のデザイン」で、墓碑には開明書店の編集長であった夏丐尊による碑文が書かれている⁽³³⁾。橋型の墓石の正面から向かって左には「内山書店創立者 内山美喜子之墓」、右には「内山書店創東者 内山完造之墓」⁽³⁴⁾と刻まれている。後方の石碑は、完造生誕 100 周年の 1985 年に岡山県内山完造先生顕彰会が建てたものである。



写真 26 内山完造・みきの墓 (正面)



写真 27 内山完造・みきの墓 (側面)

むすびにかえて

以上、筆者が自分の目で見えてきたところを中心に、『花甲録』以外の史資料でも情報を追加しながら、上海における内山完造ゆかりの地を紹介した。外灘界隈は、上海の経済と交易の中心地であり、完造の商人としての血が騒いだのではないかと、いろいろな刺激を受けたのではないかと感じた。虹口地区では、キリスト教を信仰する者として活動するとともに、内山書店で出会った人々との交流から、「漫談」と称して文章を書いたり講演をおこなうようになり、完造が文化人として活躍していく様子が目に浮かんだ。変わりゆく上海のなかで、いずれ完造ゆかりの地にもさらなる変化が訪れるだろう。その意味で今回の調査は、2019 年時点の状況を記録にとどめた点で意義があると考えている。

内山完造は『上海漫語』(改造社、1938 年)を筆頭に、上海にまつわる著作、原稿を数多く残している。帰国後も、「見たい見たい私は上海が見たい。その愛着はとうとう私に想像の上海を描かせるようになった」(1951 年 2 月 1 日「想像の上海」岩 347 頁)、「わが愛する上海よ」(1956 年 11 月 26 日「私の挨拶」岩 392 頁)と記すなど、完造の上海愛は生涯つきることがなかった。これほどまでに上海を愛し、上海に愛された日本人はいただろうか。

上海には、内山完造が過ごした時代から 70 年以上経っても、いたるところに完造の残像があるようだった。最初の調査から 2 年が経ち、現在は新型コロナウイルスの影響で、気楽に上海に赴くことができない。情勢が落ち着いたら、再び完造の残像を求めて、まだまわり足りない上海、また中国各地に足を運びたい。

注

(1) 拙稿「内山完造の足跡を辿る ― 岡山・大阪・京都 ―」『人文学研究所報』No. 61, 2019 年 3 月。

- (2) 2019年1月17～20日、8月8～11日の2度、上海を訪問した。1月は研究会のメンバーの孫安石、内山籬、大里浩秋、菊池敏夫、中村みどりとともに調査をおこない、8月は孫安石、松本和也、柳澤和也（以上、敬称略）のほか、東郷佳朗神奈川大学准教授、浜井和史帝京大学准教授が同行した。現地では、いずれも上海街歩きのプロである陳祖恩先生にご案内、ご協力いただいた。深く感謝申し上げます。
- (3) 『花甲録』（岩波書店、1960年）は、内山完造による1945年までの自伝（1950年執筆）に、その後の記録から後妻・マサノが「内山の伝記ともなるようなもの」を加えて出版されたものである。後に自伝部分のみ、東洋文庫シリーズ『花甲録——日中友好の架け橋』（平凡社、2011年）として復刻されている。本稿では、『花甲録』は頁番号のみを表記し、岩波書店版は「岩」、東洋文庫版は「東」と略記する。また、『花甲録』は後年に振り返って記述していることから、本人も「実はその年代が甚だ不確実なのである」（1919年、岩112頁、東185頁）と書いている通り、時期については必ずしも正しいわけではないが、参考までに同書掲載の西暦の年号を付すこととする。
- (4) 上海市は2002年に「上海市歴史文化風貌区・優秀歴史建築保護条例」を公布（2003年1月1日施行）し、2019年に「上海市歴史風貌区・優秀歴史建築保護条例」に改称するとともに一部改正した（2020年1月1日施行、上海市人民代表大會ウェブサイト、<http://www.spccs.sh.cn/n1939/n2440/n6985/u1ai199801.html>、2020年12月12日最終閲覧）。
- (5) 場所の同定、地図の作成にあたっては、「大阪朝日新聞特撰 最新上海地図」（『大阪朝日新聞』18076号附録、1932年3月5日）をもとに、木之内誠編著『上海歴史ガイドマップ 増補改訂版』（大修館書店、2011年）、和田博文ほか著『共同研究 上海の日本人社会とメディア 1870-1945』（岩波書店、2014年）、榎本泰子『上海——多国籍都市の百年』（中央公論新社、2009年）、小泉譲『魯迅と内山完造』（講談社、1979年）などを参考にした。地名は原則として内山完造が過ごした当時、戦前のものとしている。
- (6) 『花甲録』では「日信大薬房」と「日信薬房」の表記が見られる。本稿では、引用文以外では「日信薬房」に統一する。
- (7) 上海支店の取扱商品と事業は「綿花、糸、布のほか繰綿工場、紡績工場の経営。メリヤス、蝙蝠傘、マッチ、売薬、肥料等の取扱」とされた（日綿実業株式会社社史編纂委員会編『日綿七十年史』1962年、非売品、19頁）。日信洋行は漢口路（1922年には「漢口路8号」（1922年4月20日付、在上海船津辰一郎総領事より内田康哉外務大臣宛宛信第247号「綿布輸入商査報方ノ件」）『各国実業家関係調査雑件／調査希望』第3巻、外務省外交史料館蔵、アジア歴史資料センターレファレンスコードB11090199800）、1942年12月末現在には「漢口路103号」（前掲、日綿実業株式会社社史編纂委員会編『日綿七十年史』86頁）に存在した。なお、資料の引用にあたっては、漢数字を算用数字に改め、旧字体を新字体とした（以下同）。
- (8) 1913年の上海の日本人口は、「表 上海の日本人口」（藤田拓之『『国際都市』上海における日本人居留民の位置——租界行政との関係を中心に——』『立命館言語文化研究』21巻4号、2010年3月、122頁）では「9093人」、「上海在留日本人数の変遷（1907年～1940年）」（前掲、和田ほか著『共同研究 上海の日本人社会とメディア』2頁）では「9594人」とされており、1万人弱存在したと言える。
- (9) 前掲、榎本『上海』149頁。
- (10) 前掲、木之内編著『上海歴史ガイドマップ』79頁。
- (11) 謝薇「清末民国初期の上海における日本の医薬会社の宣伝広告」『或問』（近代東西言語文化接触研究会）25号、2014年6月、68頁参照。
- (12) 島津長次郎編『上海案内』第9版、金風社、1921年、36頁。
- (13) 同上、45頁。
- (14) 前掲、和田ほか著『共同研究 上海の日本人社会とメディア』232頁。
- (15) 「上海各国人営業種別・邦人輸出入商」一覧および「日信大薬房」広告（前掲、島津編『上海案内』）。なお、1923年の上海における日貨排斥の賠償調査に際し、日信薬房の高橋富吉が上海総領事に提出した申請書では「本店所在地 大阪市北区堂島船大工町／支店現在所在地 上海英租界交通路1056」としている（1923年8月9日付、日信薬房高橋富吉より在上海矢田七太郎総領事宛「申請書」『支那排日関係雑件／要償之部』第1巻、外務省外交史料館蔵、アジア歴史資料センターレファレンスコードB11090317400）。『花甲録』の1919年には「私の住宅と事務室とは大英租界の棋盤街の交通路と云う町にあった」（岩108頁、東179頁）との記述もある。
- (16) 1990年代半ばの再開発で路地全体が消滅した（前掲、木之内編著『上海歴史ガイドマップ』133頁）。

- (17) 「上海地方ノ日本図書及日本語ニ関スル上崎司書ノ視察報告 昭和 12 年 3 月」『滿支人日本語研究狀況調査関係雑件』第 2 卷, 外務省外交史料館蔵, アジア歴史資料センターレファレンスコード B05016121400。
- (18) 前掲, 木之内編著『上海歴史ガイドマップ』79 頁。
- (19) 森勝彦「上海越界路空間の不管地性」『国際文化学部論集』(鹿児島国際大学国際文化学部) 第 15 卷第 3 号, 2014 年 12 月, 227, 229 頁。
- (20) 前掲, 木之内編著『上海歴史ガイドマップ』77 頁。
- (21) 「魯迅先生の墓であります。万国公墓から虹口公園に移葬されたということで, その移葬にも参加すべきであったのですが, それが出来なかったことは甚だ私の遺憾とするところであります。しかし丁度〔1956 年 11 月〕18 日に〔上海に〕到着いたしましたので 19 日の朝にとりあえず墓参しました。〔……〕新築の〔魯迅〕記念館をも参観して帰りました(1956 年 11 月 26 日「私の挨拶」岩 393 頁)。
- (22) 1932 年 6 月 6 日付, 在上海村井倉松総領事より斎藤実外務大臣宛公信機密第 715 号, 「上海日本人基督教青年会ノ補助申請ニ関スル件」『助成費補助申請関係雑件』第 1 卷, 外務省外交史料館蔵, アジア歴史資料センターレファレンスコード B05015846800。
- (23) 繆君奇編著『旧影尋踪——魯迅在上海』上海文化出版社, 2010 年, 72 頁。
- (24) 上海日本人基督教青年会と上海日本人基督教会は当初は「連合」で活動をしていたが, 1914 年 6 月に日本基督教会の植村正久が「来滬した際, 上海の集会は以後, 日本基督教会の伝道局で責任をもつということになり, 崑山花園から北四川路林家花園に移って 9 月から上海日本人基督教会として発足, YMCA から分離した(池田鮮『曇り日の虹——上海日本人 YMCA 史』教文社, 1995 年, 30 頁)。前掲, 島津編『上海案内』では, 「上海日本人基督教会」の 1921 年現在の役員のうち, 「執事」として内山完造の名前がある(9 頁)。なお完造は, 日本の敗戦による「教会解散の後を受けて私が追放帰国させられる〔1947 年 12 月〕までの間, 私の住宅に於いて, 日曜学校(西林毅君が独力経営した), 教会(中山真多良牧師)を継続した(岩 73 頁, 東 125 頁)。
- (25) 前掲, 木之内編著『上海歴史ガイドマップ』130 頁。
- (26) 内山完造の名は, 『上海青年』1916 年 9 月号の「新入会員」欄に見られる(前掲, 池田『曇り日の虹』59 頁)。
- (27) 同上, 120 頁。
- (28) 第 3 回世界木刻展覧会は, 1933 年 10 月に「北四川路底千愛里 43 号」で開催され, 「内山完造が主催者となり魯迅先生蒐集品」を展示した。「前 2 回は失敗であったが今回は成功して中国人小学生の団体参観もあって賑わった(岩 191 頁, 東 308 頁)。
- (29) 日本人基督教青年会総主事・島津岬の名刺「上海基督教青年会有力者本邦視察団 王春濤外 6 名 昭和 11 年 7 月」『滿支人本邦視察旅行関係雑件／便宜供与関係』第 8 卷, 外務省外交史料館蔵, アジア歴史資料センターレファレンスコード B05015788000。
- (30) 1920 年代にキリスト教本色化(土着化)運動の影響で, 中国各地に数多くの中国式会堂が建てられた。特に開港直後の沿岸都市において, 中国式会堂が目立っていた。しかし, 文化大革命中にこれらの会堂が破壊され, 現在まで良い状態で残っているのは上海の鴻徳堂のみであるという(徐亦猛「中国の教会の宗教的儀礼と教会の建築について本色化の動き: 1920 年代を中心に」『アジア・キリスト教・多元性』(現代キリスト教思想研究会) 第 11 号, 2013 年 3 月)。
- (31) Virtual Shanghai, <https://www.virtualshanghai.net/Data/Buildings?ID=1096>, 2020 年 12 月 12 日最終閲覧。同墓地は, 公園になる前から「日曜日などには一家揃ってお弁当を持って遊んで来たいと思ふ程」の明るい環境であった(若江得行『上海生活』大日本雄弁会講談社, 1942 年, 97 頁)。なお, 文化大革命の時期, みきの墓は浦東の公園の一角に移されていた(内山籬氏談)。
- (32) 何彬「上海の墓」『国際常民文化研究叢書 3——東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史——』神奈川大学国際常民文化研究機構, 2013 年 3 月, 125 頁。
- (33) 塚本助太郎「老板と過した上海時代」『季刊鄒其山』第 9 号, 内山書店, 1985 年 9 月, 12 頁。
- (34) 現在は「内山書店創東者」と読めるが, 内山籬氏によると, 1959 年 10 月に内山完造が埋葬された際は, 「完造生前の言により」, 弟・嘉吉氏の筆による「内山書店結束者」(中国語で「結束」は「終了する」の意)との文字を転写していたという。